

「当時の姿」実感して

「山手133番館」修復完了

空き家だった「山手133番館」(横浜市中区)の建物の修復が6月末、完了した。購入し保身に当たった老舗洋菓子店モンテローザを運営する「三陽物産」(同区)の山本博士社長(52)は「できる限り創建当時の姿に戻すことにこだわった。良さを実感してもらい、今後より多くの古い建物が残ってほしい」と話す。10月1日には同館初披露の見学会とリードオルガンの演奏会が開かれる。(吉田 太一)

修復工事は昨年6月から(同市保土ヶ谷区)が始まった。市の歴史的建造物に認定され助成を受けられたことから、耐震補強に最初に着手。いざ工事に入り壁をはがしてみると、木が腐るなど想像以上に建物が傷んでいた。木材が高騰した影響も加わり費用はかさんだ。

時間もかかったが、山本さんは毎日のように現場に足を運んだという。「いつか10人以上の一流の職人が働き、修復していた。さまざまな困難を乗り越え、毎日少しずつよみがえっていき過程が楽しかった」と振り返る。

修復工事で心がけたのは「できる限りオリジナルの状態に戻すこと」。外観の復元や耐震補強は、近代建築の修繕を数多く手がけてきた1級建築士の兼弘彰が

10月の見学会で初公開 リードオルガンも演奏会



といつことだった。2階主寝室やサンルームにある大きな窓ガラスもその場に立てば景色を見るために設置されたことを実感。住み込みの使用人が使っていた「離れ」も、地面の高低差を意識した間取りだったことが分かるという。正門と別になっている。使用人の門や動線も再現する。また、工事中に見つけた電気の配線図面には、居間や食堂などの間取りが書かれており、改めて各部屋の用途を確認。食器棚を分解していた外国人宛ての横浜ヨットクラブの招待状も出てきた。今後は貸し出しも想定している。実際に快適に暮らせるように、冷暖房を完

①修復後の2階主寝室やサンルームを案内する山本さん。床は創建当時のフローリングが残る②建物の修復が完了した「山手133番館」=横浜市中区



◆山手133番館 関東大震災後の1930年ごろ山手の高台に外国人向け住宅として建てられた。敷地面積約790平方メートルで木造2階建ての主屋、使用人の付属屋、木造平屋建ての車庫の計3棟で構成。外観や室内は装飾を抑えた簡素な意匠で統一。「日本近代建築の父」と称されるチェコ出身の建築家、アントニン・レーモンド(1888~1976年)が設計した建造物と類似点が多いが、市の調査では決め手となる資料が見つからず、設計者は分かっていない。

備し浴室などは一新した。「やはり住んでこそ家。築100年ぐらいたって、『住んでいて本当にいいね』と感じ、家としての西洋館が今後もっと残っていくようなきっかけになれば」と思い描く。同社では、山手133番館を取得した思いや修復の様子などをユーチューブ「山手西洋館復元チャンネル」で公開している。

見学会では、横浜で活躍した明治期の楽器商ドリーング商会が輸入したスミス・アメリカン社製で、三陽物産所有のリードオルガン演奏も披露される。主催は同社、横浜みなとみらいホール。演奏は早川幸子さん。申し込みは、1人1通で氏名と当日の連絡先を記載し、メール(mmnh@yat.or.jp)へ。8月28日締め切り。問い合わせは、横浜みなとみらいホールチケットセンター ☎045(68)2000(月~木曜午前11時~午後4時)